

このページは、小・中学生に向けて梅光学院大学子ども学部子ども未来学科(地域共生ゼミ)の学生が作っています。

※イラスト 児島希美さん

しものせき キッズページ



▲エミール・ガレ
《楓・朝露文小瓶》

ShiMoBiに行ってみよう!!

ShiMoBi... 下関市立美術館



美術館未公認ゆるキャラ
Shimobin (しもびん)



▲下関市立美術館(市内長府黒門東町)の屋外には、多くの彫刻作品があります。

皆さんはShiMoBi(下関市立美術館)に行ったことはありますか? 1983年の開館以来、美術を愛する皆さんに親しまれてきました。当館には、本市出身の狩野芳崖をはじめ、高島北海や香月泰男など本市にゆかりのある画家の作品のほか、さまざまな美術品を所蔵しています。

今回からこのコーナーでは、ShiMoBiで開催する所蔵品展や企画展などを紹介していきます。第1回目は、4月26日~6月26日まで開催している、所蔵品展「特集... まるっと工芸・ガレ、赤間硯、現代ガラスの巨匠たち/新収蔵品紹介」です。

日本を代表する硯の一つ、赤間硯。中でも赤間関(下関の古い呼び名)で作られた硯は、生産地の名前から「赤間関硯」とも呼ばれ、赤褐色の美しい石色と巧みな飾りで知られています。「石が柔らかくて温かい」とはおかしな例えかもしれませんが、実際に見てみるとそう感じしてしまうのが不思議なところです。

堀尾信夫の硯は、研ぎ澄まされた形の美しさが特徴です。その父・卓司の作品は芸術作品としての側面が強く、一見硯に見えないもの

赤間硯を見よう!



美術品を楽しむポイント

美術品を見るとき、皆さんどんな所を見ますか? 作者は何を思いつて作ったのだろうか、どんな技法が使われているのかなど想像しながら見ると、楽しいですよ。

今回の展示では、ガラスの器や硯、焼きものなど、生活の中で使えるような作品がたくさん紹介されています。自分だったらどんなふうに使ってみようかなと考えながら見ると、ぐっと身近に感じられるかもしれません。もっと作品の背景を知りたいと思ったら、展示室の解説パネルに目を通すと、こういうものなのかを知る助けになります。

いるのかもしれない。現在、工芸の世界は後継者不足などで厳しい時代を迎えている。いつても過言ではないでしょう。伝統を受け継ぎながら、新しい挑戦を続ける作家たちの仕事を知ること、私たちに必要なことかもしれません。

皆さん!! このコーナーを読んだあとは、ShiMoBiへ出掛けましょう!

図 下関市立美術館(☎245 4 131)

もありです。父と子、2人の作品を見比べながら硯の奥深さを見ていくことも楽しみの一つだと思います。

美しい美術品・工芸作品

硯のほかにも香月泰男が絵付けをした萩焼や、エミール・ガレなどのガラス工芸作品が展示されています。香月泰男は山口県長門市出身の画家で、絵画の作品と同じように、少ない筆使いで的確に対象の特徴をとらえています。エミール・ガレの作品の特徴は多様な技法を使った繊細なデザインにあります。その作品は1900年のパリ万博などで高い評価を受けました。彼はガラスを実際に形作ったのではなく、デザインを職人たちに伝えて作らせた。多くの人々が関わって作られたからこそ、作品一つ一つに気持ちが込められているのかもしれない。



5月号の編集記者(左から)
安藤壮志さん、井上一樹さん



①ガレ工房《躑躅文花瓶》 ②堀尾信夫《ふね研》
1971年 ③堀尾卓司《華》1960年



▲収蔵庫に並べられた赤間硯。展示を待つ美術品は収蔵庫で眠っています。